

とっとり通信

2020年6月24日発行

207号

「とっとり通信」は
略して「とつう」。
いつも読んでいただき
ありがとうございます。

こんにちは！平川です。2年前より、有志が集まり「糸島お客様づくり実践塾」という勉強会をしています。毎回テーマを変え、営業やマーケティングについて10人前後でディスカッションしています。次回で70回目です。ところが3月よりコロナウイルスで開催が難しくなり、現在はズームで行っています。テーマを「あなたのおススメの本もしくは映画を教えてください」としたところ、これが思いのほか、盛り上がりました。伝える方は、話し方の練習になりますし、聞く側はおススメを知ることが出来ます。今では定番のテーマとなりました。さて話は変わります。私は好きな事が三つあります。映画を見る、本を読む。セミナー等で人の体験談を聞く。これは、ほんの数時間(本は数日)で、他人の人生を疑似体験できることです。まるで自分の事のように、喜び、悲しみ、怯え、など感情移入が出来ます。ひいては共感力を養うこと



につな갑니다。人生の教訓や生きる指針を見いだすこともありま。そして何よりも、現実に戻った時、この普段の生活に有難みを感じます。サスペンス映画の巨匠、アルフレッド・ヒッチコックが言っています。「ドラマとは、退屈な部分がカットされた人生である」と。では先日見た映画をご紹介します。では本日もはりきっていきましょう！

LIION / ライオン25年目のために
(あらすじ)一九八六年、インドのスラム街で暮らす五歳の少年サルーが主人公です。ある日、大好きな兄と仕事に出かけますが、そこで兄とはぐれ、探している間に停車中の電車内で眠ってしまいます。そのままサルーを乗せた回送列車は、ノンストップで2晩走り、大きな駅に到着します。そこはサルーの家から160キロ離れた(福岡から札幌までよりも遠い)、インドの大都市カルカッタでした。言葉がまったく通じず、誰からも相手にされません。そのうちサルーは駅の地下構内でホームレス生活を始

めます。その後、オーストラリアへ養子として引き取られます。それから25年後、サルーはかすかな風情と、Google Maps(グーグルアース)を頼りに、インドに住む実の母と兄を探し始めます。いかがでしょうか？ あらすじだけでも感動しそうですが、これ実話です。5歳といえば、年中・年長さんです。その年頃の子にとって母親の存在がどれほど大きいか。また大都会でのホームレス生活がどれほど怖いのか。想像しただけでも胸が張り裂けそうになりますが、救いは彼の周りには、優しい人が沢山いたことです。そこでこの映画の感想を2つ。サルーがホームレスをしたカルカッタは昔から貧困と大気汚染で有名です。今でも10万人ものストリートチルドレンが路上で生活しています。そんな子供たちを狙って、臓器売買や児童買春などの犯罪も珍しくありません。実際に映画の中でも、大人が子供を追いかけて、小脇にかかえて連れて行くシーンがあります。そこには日本では考えられない、恐ろしい現実があり、やるせない気持ちになりました。



2つ目の感想です。サルーを引き取って育てる母親、スー(ニコール・キッドマン)のセリフです。「世界は人であふれている。子供を産んで世界が良くなるとは限らない。恵まれない子供たちを助けるほうが、意義がある」と。スーは産める身体なのに、あえて世の中の貢献のためと、養子を引き取る選択をします。私は驚きました。こんな考えの方が本当にいいの。と心を持ったのですが、実は調べて分かったことです。それはスーを演じたニコール・キッドマン自身が元夫のトム・クルーズとの間に二人の養子を迎えているのです。頭が下がります。まさにこの映画は、自身を投影したようなストーリーでした。そしてもしこの映画を見られたら、エンドロールを見逃さないで下さい。衝撃の事実が書いてあります。思わず「えー、うそや」と声が漏れ、切ない気持ちになりました。現実には映画よりも酷なり。色々と考えさせられる素晴らしい映画でした。

発行/有限会社アサム
〒819-1127 福岡県糸島市有田中央 2-14-36
Tel: 092-321-4001 Fax: 092-321-4002
・専門学校&スクールサーチ : <http://www.asamnet.jp/>
・ブログ : <https://itorinri.com/>